

古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（１） —ノモスとピュシス—

中澤 務*

Aspects of Cross-cultural Understanding in Ancient Greek 1: Nomos and Physis

Tsutomu NAKAZAWA*

[Abstract]

The notions of “nomos” and “physis” played an important role in the cross-cultural understanding of the ancient Greeks. As to the origin and historical role played by these notions, F. Heinemann's view is still influential. His view is as follows: (1) The origin of these notions stems from ethnological studies of the various cultures of the time. (2) However, the antithetical way of thought of philosophers at that time (e.g. 'name vs reality' or 'seeming vs being') changed the notions of “nomos” and “physis” into sharp antithetical notions. (3) The Sophists used these notions to oppose 'law and convention' (nomos) to 'human nature' (physis) and accepted the latter and rejected the former.

In this paper, I reexamine his view and propose a new interpretation. The outline of my interpretation is as follows: (1) The origin of these notions was not only derived from the ethnological studies, but also from the thoughts of Protagoras, the Sophist. (2) Protagoras presupposed close interrelations between “nomos” and “physis.” (3) This presupposition was shared by many Sophists of the day including Antiphon (whom Heinemann regarded the champion of anti-nomos thought).

In my view, ancient Greeks had consistently used these twin notions as effective tools for cultural understanding.

1 はじめに

ヨーロッパにおける異文化理解の端緒は、古代ギリシア・ローマにある。古代ギリシア・ローマ文明は、オリエント文明やエジプト文明など、地中海世界における他の文化圏との経済的・文化的交流を通して形成され、発展していった。その際に、古代ギリシア・ローマ人たちが異文化との接触の中で形成していった異文化理解の枠組みは、その後のヨーロッパ世界における異文化理解の原型として重要な意味を持つ。そのような古代世界の異文化理解の実際をいくつかの視点から具体的に分析し、その特質と意義を考察することが、本論考の目的である。

* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

古代ギリシア人に、自文化と異文化の違いを意識させたきっかけは、ペルシア戦争であった。この事件を介して、古代ギリシア人の民族的アイデンティティは強化され、異民族（バルバロイ）に対するイメージが具体的に形成され、ステレオタイプ化していったのである。こうした異民族に対する意識の変化の中で、紀元前5世紀のギリシア世界では、社会や文化の起源や、多様な文化の異質性をめぐる考察が盛んにおこなわれていた。そのような考察において大きな役割を果たしたのが、ノモスとピュシスという対概念であった。

この対概念は、文化をノモスとピュシスというふたつの対立的な概念を通して分析していく概念的枠組みと考えることができる。ノモスは、通常「法律」あるいは「習慣」と訳される概念であり、社会の中で人々の思考や行動の様式を規定している規範的な力を意味する。元来ノモスは、神聖な起源を持ち人々の行動を強く縛る規範性をもった法として理解されていた。しかし、時代が下ると、次第に、特定の社会の中に存在する生活様式や風習のようなものまでも含む広い概念となっていく。これに対して、ピュシスは、一般に「自然」と訳されることが多いが、それに留まらない広い含意を持つ概念である。ピュシスは、もともと生成や、生成の結果生じたものを意味していたが、イオニア自然哲学の展開の中で、世界の普遍的本質という含意を持つようになっていった。

これらふたつの概念は、元来は対概念として使われてはいなかった。しかし、次第に、人為と自然の対比を表現する対概念として機能するようになっていき、少なくとも紀元前5世紀中葉には、広く使用されるようになった¹。そして、それ以降、さまざまな文献に頻出する対概念となったのである。それはまさに、紀元前5～4世紀の思想における共通の概念的枠組みとして機能したといえる。

では、この対概念は、どのような文脈の中で生じ、古代ギリシア人たちが自文化と異文化の特質を理解する際に、どのような機能を果たしたのであろうか。この点について、標準的な見解とみなされているのがハイニマンの研究である²。ハイニマンは、この対概念の由来と歴史的変遷を研究し、その発生源はギリシア人の民族学的な関心にあるが、その後ソフィストの影響下で大きな内実の変化を遂げるに至ったと主張している。

本論考では、このハイニマンの図式の批判的な検討をおこなう。これを通して、最終的には、この対概念が歴史的に果たした役割をめぐる新しい解釈を提示したい。それによって、この対概念が当時の異文化理解の文脈で果たした重要性と、そこでソフィストたちが果たした、より積極的な役割が明らかとなるであろう。

2 ノモスとピュシスをめぐるハイニマンの見解

まずは、ノモスとピュシスの対概念の起源と、その歴史的変遷をめぐるハイニマンの見解をまとめておこう。

①対概念の起源

この対概念の起源をめぐるのは、それをソフィストに求めるもの、パルメニデスの哲学に求めるもの、ヒポクラテスの医学思想に求めるものなど、さまざまな見解がある。ハイニマンは、これらに対して、対概念

1 明確な起源については不明。文献に明確に現れた事例として最も早いのは、おそらくフィロラオスの発言であろう（44B9）。

2 F. Heinemann, *Nomos und Physis*, Friedrich Reinhardt Verlag, 1945. 邦訳として、F. ハイニマン著、廣川洋一・玉井治・矢内光一訳『ノモスとピュシス』、みすず書房、1983年。

はギリシア人の民族感情に由来し、そこから生まれた民族学的考察の中で発展したと考える。彼が着目するのは、ヒポクラテス文書『空気、水、場所について』とヘロドトス『歴史』における民族誌的分析である。彼は、両者における枠組みの類似性を指摘し、そこでは、異文化の特質がノモス（すなわち社会的風習）とピュシス（すなわち人間の体質や自然環境）というふたつの側面から分析され、特徴付けられているとする。だが、そこでは、このふたつの概念は、後の時代に先鋭化する対立性を強く持つてはいなかったとハイニマンは主張する。すなわち、彼によれば、民族誌的分析においては、ふたつの概念は同等の価値を持ち、文化の説明において同等の役割を果たしているのである。

②対立図式の発生源

では、そのようなふたつの概念が、その後、鋭く対立させられ、価値的な差別化がなされるようになっていった原因は何であろうか。ハイニマンによれば、それは、ソクラテス以前のイオニア自然哲学の中で形成されていった、仮象と真理をめぐる二項対立図式である。彼によれば、自然哲学者たちは、その考察の中でさまざまな二項対立図式を立てた。すなわち、「言葉—行為」、「名前—現実」、「仮象—存在」という二項対立図式である。これらの対立は、「人間による間違っただけ」と、「そうした間違いから独立した真実」のあいだの対立として理解されていたが、その影響を受けて、ノモスとピュシスもまた、間違いと真理という対立図式に取り込まれ、その中で理解されるようになったというのである。

③ノモスとピュシスの概念的変容

ハイニマンによれば、以上のような哲学的二項対立図式の影響下で、ノモスとピュシスの価値的な変容が生じていった。そもそもノモスは、共同体の秩序維持のための神聖な価値を持つ強力な規範であった。ところが、紀元前5世紀の理性的な啓蒙主義の普及の中でその内実が変容していき、神聖で特別な規範から、どの社会にも存在する生活風習とみなされるようになっていったのである。その後も、ヘロドトスやプロタゴラスなどの時代には、ノモスは、まだ強い拘束力を持っていた。しかし、理性主義が強まる中で、ノモスは次第に真理の対概念として理解されていくようになり、ついには大衆の間違っただけと同一視されるに至り、その規範性を失っていったのだという。このように次第に規範性と価値を失っていったノモスに対して、ピュシスは逆に、イオニア自然哲学の展開の中で、ものごとの真実の状態を示す概念となり、ソフィストの時代になると、倫理的にもその価値的側面が強調されるようになっていったのだという。

④ソフィストの役割

ハイニマンによれば、以上のような変化を決定づけて、ノモスとピュシスを鋭く対立する概念に変化させ、ピュシスを称揚して、ノモスの価値を剥奪していったのが、ソフィストたちであった。このとき、このような役割を果たしたソフィストとしてハイニマンが念頭にしているのは、ヒippiasやアンティフォンなどのソフィストである。（プロタゴラスやその影響下にある思想は、むしろノモスの価値を強調している。）たとえば、アンティフォンは人間のピュシス（生物学的必然）を重視し、それに従った倫理を強調するとともに、ノモスを、そのような人間の利益の追求を邪魔する要素として否定的に捉え、その無力化を図ったとされる。こうして、ソフィストによって変容した対概念は、紀元前5世紀の思想に強い影響を与えていったのだという。

以上が、ノモスとピュシスという対概念の発生と、その歴史的変容をめぐるハイニマンの説明である。筆者は、このハイニマンの図式にはさまざまな問題があり、全体像の大きな修正が必要であると考えている。そこで以下、ハイニマンの説明を批判的に検討し、新しい図式を描いていく作業をおこなうことにしたい。

3 『空気、水、場所について』におけるノモスとピュシス

ノモスとピュシスという対概念の歴史的発生源を考察するにあたり、ハイニマンが最も注目する作品は、ヒポクラテス文書のひとつである『空気、水、場所について』である。この作品は、おそらくは、二つの概念が対概念となっていた紀元前5世紀中ごろに成立したと考えられる³。この作品の目的は、人間と風土の関係性に注目して、人間の病気とその人間が生きる風土的条件（風や水や土地など）の密接な関連を説明するところにある。これを明らかにするために、この作品の著者は、まず前半部（1～11）において、気候や場所が人間の健康にどのように影響するのかを具体的に説明していく。その後、後半部（12～24）になると、著者は考察の対象をギリシアの周辺地域に拡大し、周辺地域のさまざまな異民族の体質や生活様式について、民族学的な視点から考察を展開していくのである。ハイニマンは、この後半部の分析に、ノモスとピュシスの典型的な民族学的使用が見られるとする。

たしかに、『空気、水、場所について』後半部の分析は、ヘロドトスと共通性のある分類の枠組みが見られ、民族学的考察の影響をうかがうことができる。この作品の著者は、地中海地域を大きくアジアとヨーロッパに区分する。彼はまず、アジアの住民の特徴を、穏やかな気候と豊かな土地に求める。そして、アジアの住民たちは、その風土の影響で、穏やかな性質を持ち、体質も均等であるが、しかしその反面、勇気や忍耐強さに欠けると主張する（12）。その後、彼はアジアの住人たちの体型的な特徴を具体的に引き上げ、そのピュシスとノモスとの関連を説明していく（13～16）。こうしてアジアの住民の特質を説明すると、彼は次にヨーロッパの分析に入るが、アジアとは異なり、その分析は大部分がスキタイ人の身体的特質をめぐる考察となっている（17～22）。その後、彼は、ヨーロッパのほかの民族の身体的特質と気質をめぐり、それが部族によって大きく異なっている原因を、ヨーロッパにおける風土の多様性を中心に説明していく（23～24）。

さて、以上のような考察の中で、ノモスとピュシスはどのように機能しているのだろうか。まずは、議論の中に登場する具体的な説明を整理しておこう。

	節	説明の内容
①	12	アジアでは、季節をとおして気候がうまく調和しているがゆえに、すべてのものが美しく大きく育ち、土地も耕作しやすく、また住民の性質も穏やかである。また、土地や水が豊かであるために、人間はよく育ち、美しく身長があり、形状や身長に個体差が少ない。
②	12	アジアの人々は、①におけるような自然環境ゆえに、勇気、忍耐力、勤勉さ、気概などが少なく、快楽志向が強い。
③	13	ヨーロッパとアジアの境界線の右側に住んでいる部族の人々は、季節の変化と土地の性質が多様であるために、それが人間の体の自然性に影響する。

3 ハイニマンは、付論においてこの著作の成立年代の詳しい考察をおこなっている。それによれば、この著作が成立したのは、紀元前430年ころの、ペロポネソス戦争勃発以前のペリクレス時代であるという。筆者もこの分析に従う。

④	14	アジアに住む長頭族の頭は、生まれたときに頭を人為的に長くされるという習慣がピュシスを変化させ、遺伝的な特質となったものである。
⑤	15	アジアのパシス河のほとりに住む人々は、沼地が多く雨の多い土地で暮らしているため、水分過多によって、背が高く肥満した体質をしている。
⑥	16 23	アジアに住む人々の気質が穏やかであるのは、季節の変化が少ないことと、王政をとっていることが原因である。
⑦	17	ヨーロッパのスキタイ人（サウロマタイ族）の女性が右の乳房を持っていないのは、右腕で大きなものを支えるために、赤ん坊のときに熱した器具で焼いてしまうためである。
⑧	19	スキタイ人は、北風と寒さ、そして変化の少ない気候ゆえに、水分を含んだ肥満体形をしている。
⑨	20	スキタイ人の体が一様に広くなるのは、彼らに乗馬の習慣があり、また、坐る生活をしているからである。
⑩	21	スキタイ人の女性は、脂肪が多く、水分過多であるために、多産でない。
⑪	21	スキタイ人の男性は、水分過多と、乗馬の習慣ゆえに、多産でない。
⑫	22	スキタイ人は、乗馬によって不具合を起こした腰の治療のために耳の後ろの血管を切ることが原因で、生殖不能となる。
⑬	23	ヨーロッパで暮らす諸部族において性質の個体差が大きいのは、精液が胎児に形成されるさいに、季節の変化が影響を及ぼすからである。
⑭	24	ヨーロッパ人は、ピュシス（生まれつき）においては一様に勇敢で忍耐強いわけではないが、ノモスの力によって、そのような性格を身につける。
⑮	24	ヨーロッパで暮らす諸部族が多様な性質をしているのは、それぞれの環境の違いが影響している。

以上のように、『空気、水、場所について』の著者は、アジアとヨーロッパに住む諸部族の体質と性格の原因を、ノモスとピュシスという二つの要因から分析している。その説明パターンは、次のように分類することができるだろう。

（１）ピュシスを原因とする説明

まず、もっとも多く登場するのが、部族の性格と体形の特質を、彼らが生活している地域の自然環境（ピュシス）によって説明する方法である（①②③⑤⑧⑩⑬⑮）。これらの説明においては、部族が暮らす土地の風や水、あるいは季節や土地が持つ特定の性質が、人間の身体の特質を作り上げており、そこでは彼らの生活習慣は影響を与えない。

（２）ノモスを原因とする説明

これに対して、体質や気質の違いを、ピュシスではなくノモスが作り出すという説明も見られる（⑦⑨⑫⑭）。⑦において、サウロマタイ族の女性の乳房の欠如という身体的特徴は、自然環境ではなく、風習によって人為的に作り出される。⑨においても同様に、スキタイ人の体の特性の原因が、乗馬と坐りがちな生活習

慣に帰されている。また、⑭では、ノモスとピュシスが対比され、スキタイ人の勇敢さが、ピュシスではなくてノモスによって生じていることが強調されている。また⑯では、まずは乗馬というノモスが腰の不具合を引き起こし、その治療のために施された医学的措置が、生殖不能を引き起こしている。

(3) ピュシスとノモスという二つの原因による説明

さらに、種族の持つ特徴の原因を、ピュシスとノモスの両側面から説明する場面も存在する(⑥⑪)。この場合、ピュシスとノモスは、同じ特徴を作る複合的原因として働いている。⑥では、アジア人の気質の原因が、季節の変化の少なさ(ピュシス)と、王政という政治形態(ノモス)という二つの要因にあることが主張されている。また、⑪でも同様に、スキタイ人男性が多産でない原因が、体の水分過多というピュシスの要因だけでなく、乗馬の習慣というノモスにも帰されている。

(4) ノモスによって変化したピュシスを原因とする説明

この説明では、ノモスが人間の身体的特性(ピュシス)に変化を与え、変化したピュシスが特殊な身体的特性を作り出すという、複雑な原因が考えられている(④)。そこでは、長頭族の頭が長いという特質の原因が説明されている。すなわち、長頭族は、はじめは生まれた赤ん坊の頭を人為的に長くしていたのだが、やがてそれがピュシスとなり、遺伝的特性に変化したというのである。これは、進化論でいえば、獲得形質遺伝に相当する説明とみなすことができるだろう。このタイプの説明は一例しか述べられておらず、原因説明として一般的なものとはいえない。しかし、この論考の著者が、ノモスとピュシスが密接に融合する可能性を認識していた明確な証拠といえるだろう。

以上のように、『空気、水、場所について』の著者によって展開される説明は、諸部族における性格や体質の違いを原因論的に解明する試みであり、ノモスとピュシスは、さまざまな特徴を作り出す二つの原因として理解されている。

このような原因論的説明は、民族学に由来するものではない。実際には、このような説明を著者に促したのは、医学的な関心である。そもそも、この作品のテーマは、風土と病気の関連を解明することであり、後半の議論は、前半での考察の延長として展開している。後半の議論でノモスとピュシスが登場したのは、前半におけるピュシスを中心とした分析の中に、異民族との違いを説明するためのノモスという原因が組み込まれたからであり、民族学的な関心があったためではない。実際、ハイニマンもこの点を認め、著者は分類の枠組みを民族学から借りているだけであり、その本来の関心は医学にあるとしている。

しかし、もしそうであるとしたら、この著作におけるノモスとピュシスの使用は、本当に民族学に由来すると考えてよいのであろうか。というのも、著者はたしかに民族学の分類の枠組みを借りているが、ノモスとピュシスの対概念の使用の枠組みは、民族学とは異なる発想に基づいている可能性が高いからである。そこで次章では、民族学におけるノモスとピュシスの使用法と比較することにしよう。

4 ヘロドトスにおけるノモスとピュシス

ヘロドトスの『歴史』には、ノモスとピュシスの対概念が明確に登場しているが、『空気、水、場所について』における対概念の使用とは異なる使い方がなされているように思われる。

まずなによりも、ヘロドトスにおける分析は記述的なものであり、原因論的な要素は薄い。つまり、ヘロドトスには、民族の多様な性格や身体的特徴を生み出す原因を、ノモスやピュシスを通して究明しようとする姿勢が見られないのである。ヘロドトスがおこなっているのは、むしろ、異文化の多様性を、その風習（ノモス）を列挙することによって、記述的に解明していくことである。そのため、『歴史』の中には、バビロン（1, 192-200）、マッサゲタイ（1, 216）、エジプト（2, 35-98）、スキタイ（4, 59-75）、トラキア（5, 3-10）などの異文化のノモスを列挙する記述が多く登場する。

この点は、両者の分析において共通する要素であるスキタイ人をめぐる記述を見れば、その違いがよくわかるであろう。ヘロドトスは、4, 59-75 において、スキタイ人のノモスについて、雑多な民族誌的記述を展開している。その内容は次のようなものである。

- ①スキタイ人が祀る神々（59）
- ②スキタイ人たちの犠牲の儀式の内容（60-63）
- ③戦争におけるスキタイ人たちの様々な風習（64-66）
- ④占いにおけるスキタイ人たちの様々な風習（67-69）
- ⑤スキタイ人たちの誓約のしかた（70）
- ⑥埋葬におけるスキタイ人たちの様々な風習（71-75）

ここにおいてなされているのは、ノモスの具体的な記述であり、『空気、水、場所について』でなされているような民族的特徴の原因分析ではない。また、そこに登場するのは、ノモスのみであり、ピュシスの側面についてはふれられていない⁴。『空気、水、場所について』と『歴史』には、おそらくは、共通する情報源が存在している⁵。それを考えれば、これらの違いは注目に値するものといえるであろう。

そもそも、ヘロドトスの主要な関心はノモスにある。たとえば、3, 38 におけるペルシア王ダレイオスの逸話を見てみよう。それによれば、ダレイオスは、側近のギリシア人に、どれほどの金をもらったら死んだ父親の肉を食べる気になるかと尋ねた。これに対して、ギリシア人は、いくら金をもらってもそのようなことはしないと答えた。すると、ダレイオスは次に、両親の肉を食べる習慣を持つインドの部族カッラティア人を呼び、どれほどの金をもらえば死んだ父親を火葬にすることを承知するかとたずねた。すると、彼は大声をあげて王に口を謹んで欲しいと述べたという。ヘロドトスは、この逸話から、慣習（ノモス）の力がいかに強いものであるかを強調し、「ノモスこそ万象の王」というピンダロスの言葉を引用している。

ヘロドトスのそもそもの関心は、人間に対してこのような強い力を持つノモスのあり方を明らかにすることにある。もちろん、ヘロドトスの記述の中にノモスとピュシスが対置されて登場するのは確かである。だが、あくまでも対句表現として登場するのみであり、ピュシスの内実や、ノモスとピュシスの間の関係が具

4 ヘロドトスによるスキティアの説明において、ピュシス的な要素と見なしうるのは、彼らの生活様式に対する風土的な影響であろう。すなわち、ヘロドトスによれば、スキティア人たちは、町や城壁を築かず、農耕をせずに遊牧生活を送り、みなが馬に乗り弓兵として戦うが、そうした彼らの独特の生活様式は、平坦で牧草に富み、河川が多くて水が豊富であることに由来しているのだと説明している（4, 46-7）。したがって、ヘロドトスの説明にピュシス的な側面は確かに存在しているといえるが、しかしそれは、『空気、水、場所について』においてなされているピュシス的な説明とは、その内実においても、重要性においても、大きな違いがあるといえるだろう。

5 たとえば、1, 105 では、スキティア人に存在する「おんな病」の話が語られているが、これは『空気、水、場所について』で語られる生殖不能者のふるまいと共通する。

体的に論じられることはほとんどないのである⁶。

これに対して、『空気、水、場所について』の著者の関心は、ノモスではなくピュシスにある。すなわち、著者が論じている多様性は、社会的風習の多様性ではなく、人間の体質や性格の多様性、すなわちピュシスの多様性なのである。

以上のように、ヘロドトスと『空気、水、場所について』では、その背後にある目的と関心が大きく異なり、それゆえに、ノモスとピュシスが分析において果たしている役割も異なっている。ヘロドトスの分析が、民族学的関心に由来する典型的な議論であるとしたら、『空気、水、場所について』の分析は、それとは異なる流れに属するものと考えなければならない。われわれはむしろ、紀元前5世紀中葉には、民族学的関心だけでなく、それとは異なる関心が存在しており、『空気、水、場所について』においては、こうした複数の関心が交錯していると考えべきではないだろうか。

そのような別の流れとして、筆者はプロタゴラスの思想を想定すべきだと考える。というのも、プロタゴラスは、ハイニマンも認めるとおり、民族学とは異なる視点からノモスの重要性に着目し、影響を与えていたからである。また、文化をめぐるプロタゴラスの分析は、ノモスだけでなくピュシスにも注目しており、その分析手法は『空気、水、場所について』での分析と共通性を持っているように思われる。そこで次に、われわれは、プロタゴラスを中心としたソフィストの思想が、『空気、水、場所について』の著者に影響を与えた可能性を探っていくことにしたい。

5 ソフィストにおけるノモスとピュシス①

ハイニマンは、プロタゴラスにおけるノモスの思想は、民族学的な、対立関係のない概念使用に影響を与えていると主張している⁷。このプロタゴラスの影響力をめぐる評価については、ハイニマンの評価は正しい。だが彼は、プロタゴラスにおけるノモスの拘束力ばかりに着目し、彼においてはノモスとピュシスは有機的に連関し、それが彼の倫理思想の基盤になっているという事実を見逃している。そこで次に、このような視点から、プロタゴラスの思想を考察していくことにしたい⁸。

プロタゴラスの倫理思想を考察するさいに重要なのは、プラトンの『プロタゴラス』である。そこでプラトンは、倫理的問題をめぐるプロタゴラスとソクラテスを対話させているが、その議論を始めるに先立って、プロタゴラスは、徳の教育可能性をめぐる長大な演説をおこなう (*Prot.* 320c-328d)。

彼の演説は、神話の部分と理論的説明のふたつの部分からなる。まず、神話の部分では、徳がすべての市民によって所有され、教育されているということが示される。これを彼は神話を通して説明していく。

まず彼が語るのは、プロメテウスの神話である (*Prot.* 320c-322a)。彼によれば、神々によってこの世界のさまざまな生き物が作られたとき、神々はプロメテウスとエピメテウスの兄弟神を呼び、それぞれの種族が滅びぬよう、それぞれに固有の能力を分配するように命じた。エピメテウスがこの任にあたり、それぞれに能力を分配していった。しかし、愚かなエピメテウスは能力を使い果たし、人間に与えるべき能力がなく

6 たとえば、2, 45 には「このような物語を伝えるギリシア人は、エジプト人の性格（ピュシス）にも習慣（ノモス）にも全く無知であるとしか私には思われぬ」という言葉が見られる。しかし、ピュシスとノモスの具体的な内容は論じられていない。

7 Heinemann, *op. cit.*, p. 81. (邦訳、94 頁。)

8 以下の議論は、中澤務「ソフィスト・プロタゴラスにおける共同体と倫理」、『関西大学文学論集』、64-1 (2014)、55-78 頁に基づいている。

なってしまった。プロメテウスは、しかたなく、ヘパイストスとアテナのもとから技術的知恵を火といっしょに盗み出して、人間に与えた。これによって、人間は自然世界を生き延びることができた。

さて、その後、人類は神を崇拜し、言葉を発明して、衣食住を確保できるようになったが、いまだ野生動物の脅威を拭い去ることはできなかった。なぜなら、政治的技術を持っていなかったために、国を形成できなかったからである。そこでゼウスは、人間に「謙譲心（アイドース）」と「道義心（ディケー）」を与え、これらをすべての人間に授けるよう命じ、徳を持たない人間を処刑する法を作らせた。

さて、以上の神話によって、人間は徳を有することが明らかとなったが、プロタゴラスは、それは自然に身につくものではなく、教育を通して身につくものだと主張する。彼がその証拠とするのは、徳をめぐる人々のふるまいである。すなわち、人々は、徳を持たない人間に対して哀れみではなく、怒りと罰と忠告を投げつける。これは、人々が徳を教育可能なものとみなしている証拠なのである（*Prot.* 323a-324d）。

次にプロタゴラスは、徳が教育可能であるにもかかわらず、優れた市民が自分の子どもの教育に失敗することがある理由を、つぎのように説明する。彼はまず、すべての市民が自分の子どもに徳を教育する最大限の努力をしていることを指摘し、それでも教育に失敗することがある原因を、子どもが持って生まれた資質の優劣によって説明する。すなわち、優れた市民の子どもであっても、資質が劣っていれば優れた人間にはなれないのである（*Prot.* 324d-327e）。このように、最低限の徳であればすべての市民が身につけることができるが、それ以上に優れた者になるためには、資質と訓練が必要なのである（*Prot.* 327e-328d）。

以上のプロタゴラスの説明を、ノモスとピュシスという観点から考えてみよう。人類の誕生と共同体の形成の物語は、当時存在していた社会起源論の流れに属するものであり、プロタゴラスはそこで、人間が生存するために社会を形成することの重要性と、その社会の維持のためにノモスが必要とされることを強調している。

だが、プロタゴラスの議論で重要なのは、ノモスだけではない。なぜなら、共同体においてノモスが維持されるためには、その基盤となる社会を形成する倫理的性質、すなわち、謙譲心（アイドース）と道義心（ディケー）が、あらかじめ人間に備わっていなければならないからである。すなわち、人間が契約によって社会を形成したという社会契約論的な説明とは異なり、プロタゴラスの説明は、単にノモスが理性的に合意されるだけでは社会は形成されないのである。この謙譲心と道義心というふたつの性質は、ゼウスによって与えられ、人間の中に生まれつきその傾向性が植え込まれているものだと考えることができる。もちろん、それらは単に人間が生まれながらに持っているものではない。それらは、人間が成長していく過程で、教育を通して身に付けていく必要がある。だが、プロタゴラスは、そこでも人間には、それを受け入れる、生まれながらの資質があり、教育はそのような資質を磨いていくことだと考えている。

このような、ノモスとピュシスの密接な相関関係を想定するのは、プロタゴラスだけではない。彼に近い発想は、その影響下にあると考えられるアノニマス・イアンブリキにも見て取ることができる。アノニマス・イアンブリキは、法と正義の重要性を強調しており、人間は他人より多くのものを所有すること（プレオネクシア）を求めずに、法に従って生きるべきだと主張するが、そうした法と正義は人間たちの王であり、ピュシスに強く結びつけられているのだと主張している（DK89, 6(1)）。アノニマス・イアンブリキにとって、法と正義は、単に社会の成員が合意したものではなく、人間のピュシスを基盤として、そこから生じたものである。

以上のように、プロタゴラスや、その影響下にある思想においては、ノモスとピュシスは密接に関連している。すなわち、ノモスの根底にはピュシスが存在しており、ピュシスがノモスの成立を背後で支えているのである。

こうした発想は、当時すでに、民族学的発想と結びついていたと考えることができる。というのも、同様

にプロタゴラスの影響下にあるソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』では、各地のノモスの多様性が、民族誌的な観点から対比的に説明されており、この文書の作者は、プロタゴラスと民族学的関心の両方の影響を受けていると考えることができるからである。たとえば、次のような箇所が典型的であろう。

トラキア人にとって、若い娘が入墨をするのは装飾であるが、それ以外の人々にとっては、入墨は犯罪者に対する罰である。また、スキタイ人は、男を殺した者がその頭の皮を剥ぎ、髪の毛は馬の前に付けて飾り、頭蓋骨は金や銀で鍍金をして、それを使って酒を飲み、神々に献酒することを美しいと見なしている。だが、ギリシア人の中に、そのようなことをする者と一緒に同じ家に入って行こうとする者はいない。

マッサゲタイ人は、自分の親を切り刻んで食べる。そして、子どもたちの中に葬られることが、最も美しい葬儀だと思われる。だが、もしギリシアでだれかがそんなことをすれば、彼はギリシアから追放され、醜く恐ろしいことをした者として、悲惨な死を迎えることになるだろう。(DK90, 2(13)-(14))

ここでは、スキタイ人の風習への言及や、ヘロドトスに登場した、葬儀において親の肉を食べる風習などが述べられており、民族学的関心との密接な連関を認めることができる。『空気、水、場所について』の著者だけでなく、当時、プロタゴラス的な文化相対主義の思想と、民族学的関心が広く結び付けられていたことの証拠といえるであろう⁹。そして、『空気、水、場所について』の著者も、そうした思想傾向の影響下にあるといえるのではないだろうか。

6 ソフィストにおけるノモスとピュシス②

このように、ソフィストを代表するプロタゴラスに、ノモスとピュシスを同等に重視する姿勢が見られるにも関わらず、ハイニマンがノモスからの価値剥奪をソフィストに帰するのは、プロタゴラスとは異質の思想傾向を持つアンティフォンのようなソフィストがいると考えるからである。そこで次に、アンティフォンの思想を検討し、ハイニマンの解釈が成り立たないことを明らかにしよう¹⁰。

ハイニマンは、かなりの分量を割いてアンティフォンの思想、特に DK44 のオクシュリンコス・パピルス断片群の分析をおこなっている¹¹。彼によれば、そこでのアンティフォンの思想の基盤にあるのは、「ピュシスの必然」、すなわち、人間はみな自然の必然的法則に縛られており、それが人間の行動の絶対的な規範であるという確信である。彼はその規範の基準として、有益さ（クシュンペロン）を持ち出す。彼によれば、人間が有益さを実現するためには、ピュシスに従わなければならない。これに対して、ノモスは、人間にとって真の有益さを実現してくれるものではなく、ノモスはピュシスに反することを命じる。こうした分析を、ハイニマンは、カリクレスの快楽主義的な思想に重ね、アンティフォンもまた、ノモスの価値を否定し、ピュシスに従うべきだと主張しているとするのである。

9 この文書の執筆時期は、通常は、紀元前 400 年前後と推定されている。この推定が正しければ、紀元前 5 世紀の終り頃には、こうした関心の結びつきは一般的なものになっていたと考えることができるであろう。

10 以下の議論は、中澤務「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想 (1) (2) (3)」、『関西大学文学論集』、61-1, 2, 3 (2011) の議論に基づいている。

11 Heinemann, *op. cit.*, p. 133-142. (邦訳、155-165 頁。)

アンティフォンに対するこうした見方は、DK44の断片群が20世紀初頭に発見されて以来、主流の解釈であった。しかし現在では、このような解釈は、さまざまな観点から批判されている。

なによりも問題なのは、アンティフォンがここでノモスの規範性を否定し、ピュシスのみを規範として行動すべきだという主張をしているという見方であろう。というのも、実際にアンティフォンのテキストから読み取れるのは、ノモスとピュシスが敵対的であるという事実の指摘であり、人間はピュシスにのみ従うべきだという規範的な主張は見られないからである。たしかに、アンティフォンが、ノモスを、人間のピュシスに反することを命じるものとして位置づけていることは確かである。だが、アンティフォンがテキストの中で実際におこなっているのは、ノモスが抱える欠陥や矛盾の指摘なのであり、彼はノモスには規範としての力がないとも、そのような力を否定するべきだとも述べていないのである。

この事実は、ノモスとピュシスをめぐるアンティフォンの分析が、規範的な主張ではなく、むしろ、記述的な分析であったことを示唆しているように思われる。すなわち、アンティフォンは、彼の生きている社会の倫理的構造を、ノモスとピュシスの対概念を使って、現実主義的な視点から批判的に分析しているのである。では、そのようなアンティフォンの分析は、ハイニマンの想定するような、ノモスを無視して、欲求の充足のみを求めるような倫理を必然的に含意しているのだろうか。そうではない。なぜなら、アンティフォンの想定する「有益さ」とは、ノモスを否定することによってではなく、むしろ、ノモスの強制的な力の中で、できるだけピュシスにおける損害が生じないようにする行動戦略によって実現すると考えられるからである。

以上と同様の見方は、トラシュマコスについても成立するように思われる。トラシュマコスは、プラトンの『国家』第一巻において、正義は強者の利益であるという主張をしている。そこから、多くの研究者は、トラシュマコスはノモスとしての正義を否定し、弱者を支配して利益を奪い取るピュシスとしての正義を、新しい規範として提唱しているのだと考えた。しかし、トラシュマコスの実際の発言には、そのような規範的な含意は見られない。トラシュマコスは、現実の社会における正義の成立構造を冷徹に分析しているのであり、その目的は、ノモスを否定した新しい倫理を作り出すことではないのである。

このように、アンティフォンやトラシュマコスなどの議論におけるノモスとピュシスの対概念は、ノモスの価値と規範性を剥奪するために利用されているのではない¹²。むしろ彼らは、プロタゴラスとは異なる、より現実主義的でシニカルな視点から、当時の社会の現実のノモスの姿を解剖学的に分析している。そして、ノモスと人間のピュシスとの緊張した関係を描き出すことによって、社会の真実の姿と、そこでの人間の倫理の複雑なあり方を明らかにしようとしているのである¹³。

7 哲学的対概念としてのノモスとピュシス

ハイニマンは、この時期に成立した仮象と真理をめぐる二項対立図式が、ノモスとピュシスの変容につながったと考えた。しかし、すでに明らかになったように、ノモスとピュシスの対立図式は、ソフィストにお

12 ヒッピアスについても同様に理解することができる。すくなくとも、彼の短い表現を、規範的な主張と断言することはできないだろう。

13 例外はカリクレスであり、彼はピュシスの正義を明確に主張し、ノモスの価値を否定している。彼の主張は、明らかに規範的なものであり、ノモスを無視して、強者として生きるべきことを主張している。だが、彼の主張は、ソフィストの思想としてではなく、ソフィストの分析の影響を受けた、権力を追求する政治家の主張として読むべきであろう。

いても価値的な対立を含意しない以上、すくなくとも倫理思想の場面においては、哲学的な二項対立図式に重ねることはできない。

ノモスとピュシスの対概念が、哲学的対立図式に重ねられている事例が存在することは確かである。ただ、われわれは、そのような事例の多くは、認識論や言語論に関わる文脈の中で提示されているという事実注意到する必要がある。たしかに、このような文脈においては、ノモスとピュシスという概念は、思いなしと真実という対比に重ねられ、ノモスは、真実ではないものとして捉えられていたのかもしれない。

そのような明確な二項対立が見られる事例をいくつか取り上げよう。まず、われわれは、ヒポクラテス文書『神聖病』(17)におけるノモスと事実の対立を挙げることができる。そこでは、横隔膜の名称の正しさが問題になっており、横隔膜が「プレネス(=理解するもの)」と呼ばれるのはノモスによるにすぎず、実際には、横隔膜は理解する力を持たないと述べられている。ここでは、プレネスという名称が、事実を正しく意味していないがゆえに、正しい名称ではないということが含意されている。

これと同様の含意を持つ認識論的主張として、われわれは、デモクリトスにおけるノモスと真実の対立を挙げることができるだろう(DK68B9, DK68B125)。そこでデモクリトスは、「ノモスによれば甘さ、ノモスによれば辛さ、ノモスによれば色、しかし真実にはアトムと空虚」と述べている。これは、世界に本当に存在するものはアトムと空虚であり、感覚的な性質は現実には存在しないという主張であるが、ここでは、そのような、本当は存在しないものがノモスと述べられ、真実と対立させられている。

以上のような文脈で語られるノモスは、たしかに哲学的二項対立図式に基づいており、虚偽の概念と密接に結びついているといえるだろう。

しかし、それはあくまでも、こうした認識論的・言語論的文脈の中でだけ成立する、特殊な事例と考えるべきである。たとえば、上述のデモクリトスにおいても、認識論的な文脈においては、ノモスは、真実ではないものを意味する概念として使われている。しかし、倫理的な発言の中では、デモクリトスは、そのような含意なしに、ノモスという言葉を使っているのである¹⁴。この事実から明らかのように、ノモスという概念は、使用される文脈によって異なる含意を有しており、倫理的な文脈においては、虚偽と結び付けられるような含意は持っていなかったのである。

8 結論

以上の考察が正しければ、われわれは、ノモスとピュシスという対概念の歴史的変遷をめぐるハイニマンの図式を大幅に変更する必要があるだろう。われわれの想定する、新しい図式は、次のようなものとなる。

まず、この対概念は、単に民族学的文脈からだけではなく、医学における風土論的関心からも生じており、後者の分析には、ノモスとピュシスをめぐるソフィストの発想が強く影響している。『空気、水、場所について』における対概念の独特の異文化分析は、このような要素が結合することで確立されたものだと考えることができる。

そのような分析に見られるノモスとピュシスの相互依存性と両面性を前提とする分析手法は、プロタゴラスに発するソフィストの方法論であったと考えることができる。そして、その手法は、プロタゴラスとその影響下にある思想家だけではなく、それとは異なる社会観を有する、アンティフォンやトラシュマコスなどのソフィストにも共通した方法論であり、ソフィストの思想に一貫したものであったと考えられる。

14 「ノモスは、人々の生に善行を施そうと欲する。しかし、それが可能なのは、人びと自らがよい目に会おうと欲するときである。というのも、従う人々にノモスは固有の徳を示すから」(DK68B248)など。

そこでは、ノモスの規範性や価値が否定されたことはなく、ノモスとピュシスは、人間の倫理の重要なふたつの要素として、つねに同様の規範性を有している。ノモスに対する捉え方の変化は、社会的な状況の変化と、そのような状況下で社会を現実的に分析する傾向に由来するものである。

以上のように、ソフィストたちによって発展していったノモスとピュシスという対概念は、紀元前5世紀において、ギリシア人が自文化と異文化を分析し、理解するための概念図式として有効に機能し続けた。そして、それがこの時代の文化に対するアプローチの独自性を与えているのである。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成25年度～平成29年度）」によって行われた。